

# 琉球大学学術リポジトリ

子どもの言語シフトとそれに対してとられた家族言語政策(FLP)に影響を与える要因—複線径路・等至性アプローチ(TEA)を用いた在日シリア人の母親の語りによる分析—

メタデータ	言語: ja 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2023-05-12 キーワード (Ja): 継承語維持, 家族言語政策(FLP), 言語シフト, コードスイッチング キーワード (En): Heritage language maintenance, family language policy (FLP), language shift, code switching 作成者: エネザン, バラ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019826">https://doi.org/10.24564/0002019826</a>

# 子どもの言語シフトとそれに対してとられた家族言語政策（FLP）に 影響を与える要因 —— 複線径路・等至性アプローチ（TEA）を用いた在日シリア人の 母親の語りによる分析 ——

エネザン バラ

- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| I. はじめに   | V. 分析方法と分析手順    |
| II. 先行研究  | VI. 分析結果        |
| III. 研究目的 | VII. 総合的考察      |
| IV. 調査協力者 | VIII. まとめと今後の課題 |

キーワード：継承語維持，家族言語政策（FLP），言語シフト，コードスイッチング

## I. はじめに

バイリンガルの環境で育つ移民の子どもたちは言語シフトという現象に直面する。いわゆる継承語（少数派の言語）から第2言語（多数派の言語）へとシフトしていく現象である。この現象のきっかけとして、子どもが多数派言語が使用される幼稚園・保育園（エネザン，2022）・学校（Brown, 2011）に通うことが挙げられる。その際、子どもの言語シフトを止めるために、母親が継承語使用に対する何らかの方針，すなわち「家族言語政策」（Family Language Policy; 以下 FLP）をとらないと、継承語は消滅していく。本稿では、継承語から第2言語への言語シフトのパターン・特徴とそれに対する母親の対応<sup>1)</sup>をもとに、パターンや対応（行動・ストラテジー）が母親によって異なる要因を迫及する。

## II. 先行研究

### 1. 言語政策と家族言語政策（FLP）

言語政策（Language policy）とは、「選択にかかわるすべてのこと」であり、例えば複言語話者がどの言語を使うのかを選択する場合、単言語話者がどの方言やスタイルを選択するのに関わる場合などを含んでいる（Spolsky, 2009）（日本語訳は菊地，2010）。

言語政策は、3つの構成要素から成り立っている（Spolsky, 2007）。それは、①言語信念（Language beliefs）：最も重視しているアイデンティティなどに影響する価値観、②言語管理（Language management）：参加者の実践や信念を修正する権限を持っているグループの努力や決断、③言語実践（Language practices）：言語に対する行動や選択である。

また、言語政策は言語のどのようなところに焦点を当てているのかにより、3つの領

域に分類される。それは、(1)言語地位計画 (Status planning)、(2)言語形態計画 (Corpus planning) (Kloss, 1969) と、(3)言語習得計画 (Acquisition Planning) (Cooper, 1989) である。Kloss (1969) によれば、(1)言語地位計画は、他の言語に対する特定の言語の地位、または国家政府におけるある言語の地位のことである。例えば、特定のマイノリティ言語を持っている人は自分たちの言語を変えることを好む場合もある。一方、特に小さな地域に何十もの小さな言語コミュニティが密集している国では、好むと好まざるとにかかわらず、自分の言語を放棄せざるを得ない場合もある。また、同研究によれば、(2)言語形態計画は、言語自体の構造や形態、形式 (専門用語の導入やスペルの変更など) に関する計画である。Cooper (1989) によれば、(3)言語習得計画は、言語教育のことである。

さらに、言語政策はさまざまな場面に現れる。例えば、家庭、学校、近所、教会 (またはシナゴグやモスクやその他の宗教施設)、職場、公共メディア、政府などの社会的空間が挙げられる (Spolsky, 2007)。

その場面のうち本研究では、子どもが最初に育つ社会空間としての家庭に焦点を当てる。それは、子どもが継承語を習得する最初の環境は家庭であるからである。

よって、FLP は、親の言語の決断、実践、信念が子どものアウトプットにどのように影響するかを理解するための分野であり、家庭内での家族間の言語使用に関連する明示的で明確な計画のことである (King, Fogle, & Logan-Terry, 2008)。FLP は、言語政策において1つの重要で新しい応用分野であり (Spolsky, 2004, 2012)、言語政策と子どもの言語習得という2つの異なる研究分野から導き出された (King *et al.*, 2008) ものである。

言語政策における領域を FLP に当てはめた研究に King *et al.* (2008) が挙げられる。(1)言語地位計画: 親やその他の養育者たちが子どもと一緒にスペイン語と英語のどちらをいつどのように使うかを決める、(2)言語形態計画: どのような種類のスペイン語をどのような読み書き活動に使うかを決める、(3)言語習得計画: いつ、どのようにして言語を正式にあるいは非公式に指導するかを決める。

これらの研究から、FLP は、(1)言語地位計画に関する親の信念・管理・実践、(2)言語形態計画に関する親の信念・管理・実践、(3)言語習得計画に関する親の信念・管理・実践から成り立つといえる。

本研究では、言語をいつ、どのように使うかという言語地位計画に着目し、それに関する親の信念・管理・実践を検討する。言語地位計画に着目する理由としては、言語地位計画は口頭による言語使用に関わるものであり、言語使用がされていなければ、継承語を維持することは不可能であるためである。言語形態計画や言語習得計画を実践していなくても継承語維持は可能である。それは、アラビア語の言語形態計画は読み書きに関わるものであり、読み書きができないとしても言語使用を口頭でできていれば維持が可能だと考え

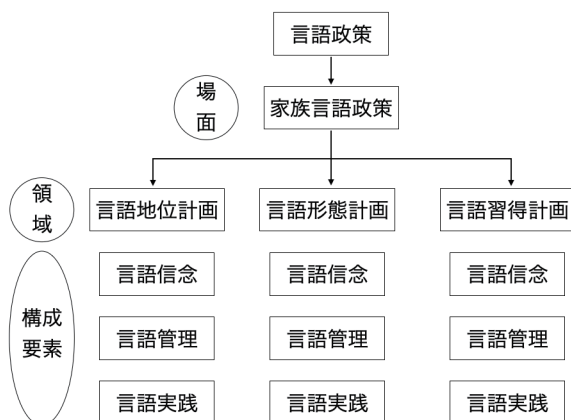


図1 言語政策と家族言語政策

られるからである。また、言語習得計画は言語を教えることに関わるものであるが、子どもに言語を教えなくても自然に親から習得すると考えられる。要するに、継承語維持を左右するのは言語地位計画だと考えられるため、本研究では、それを中心にそれに影響を与える要因を検討する。以下言語政策と家族言語政策を図1で示す。

## 2. 家族言語政策（FLP）に影響を与える要因

Curdt-Christiansen & Huang (2020) は先行研究をレビューし、FLPに関わる要因を、内的要因と外的要因に分類した（図2）。それによると、内的要因は「感情的な要因」<sup>2)</sup> (Emotional factor), 「アイデンティティー要因」 (Identity factor), 「文化的要因」 (Cultural factor), 「親からの影響力の信念」 (Parental impact beliefs), 「子どものエージェンシー」 (Child agency) の5つの要因から成り立つ。一方、外的要因は、「社会経済的要因」 (Socio-economic factors), 「社会政治的要因」 (Socio-political factors), 「社会文化的要因」 (Socio-cultural factors), 「社会言語的要因」 (Socio-linguistic factors) の4つから成り立つ。

まず、内的要因のそれぞれの定義を紹介する。「感情的な要因」は、情緒的な感情や記憶を、言語を通して共有することによって親と子ども及び家族の世代間のつながりを深める、または理解を可能にしたいと思う要因である。これは Schwartz (2010) が指摘した「家族の結束と感情的な関係」 (Family cohesiveness and emotional relations) と同様である。「アイデンティティー要因」は、親が子どもに、民族的意識を含めどのように自己を認識してほしいかに関する要因である。「文化的要因」は、家族が順守する文化的慣習と社会規範を指す。「親からの影響力の信念要因」は、親の過去の教育経験、生い立ちや気質、移住経験、バイリンガルの子どもの育てるための知識などによって動機づけられ、子どもの言

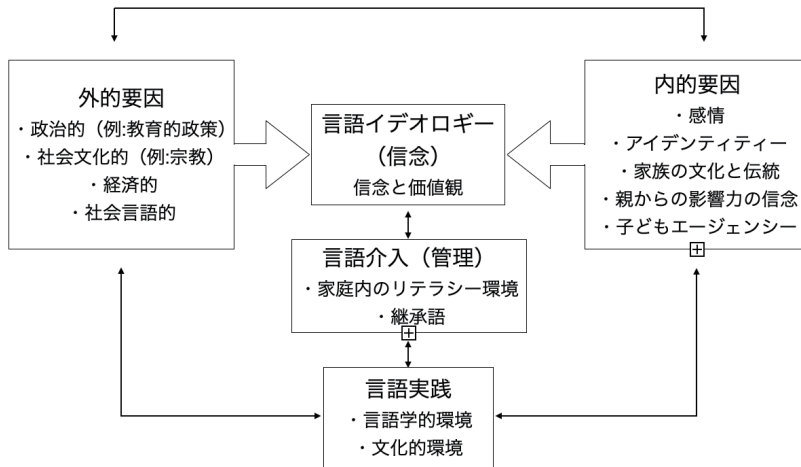


図2 FLPのダイナミック・モデル

日本語訳は筆者によるもの。

Curd-Christianen & Huang (2020) Figure 1 を引用。

語的・教育的発達に対する親の期待に反映された、家庭言語やバイリンガルで子どもを育てる能力と責任についての親の信念に関する要因のことである。なお、この要因は、言語の学習と発達のプロセスへの親の関与と投資に直接関係しているため、継承語維持において最も重要な要素の1つであると指摘されている。「子どものエージェンシー」は、家族の言語使用のパターンの決定や学校の選択など、子どもの言語使用環境を選択する際に子どもが主体的に参加することである。子どもに関連する他の要因としては、Schwartz(2010)が述べた「家族構成」(Family structure)がある。家族構成とは、年上のきょうだいの存在ときょうだいの位置が継承語維持において重要な役割を果たす要因であるというものである。

次に Curdt-Christianen & Huang (2020) が述べた外的要因のそれぞれの定義を紹介する。「社会経済的要因」とは、特定の言語が喚起する経済力や言語資本、またはその逆に関わる要因のことである。「社会政治的要因」は、所属する社会の政治的な決定における個人の権利、資源、教育に関わる言語政策、市民活動に関係した要因のことである。「社会文化的要因」は、言語は文化の表れと見なし、特定の言語が表す象徴的な文化的価値を持たせている要因のことである。「社会言語的要因」とは、どのような言語が良いか、悪いか、受け入れられるか、受け入れられないかという信念に影響を与える要因である。

なお、Curd-Christianen & Huang (2020) の指摘した内的／外的要因の間には関連性があり、またこれらの要因は家族が継承語の継続性または非継続性について重要な決定を下すための原動力として機能するとされている。

また, Curdt-Christiansen & Huang (2020) でまとめて提示されている「感情的な要因」, 「アイデンティティー要因」, 「文化的要因」, 「親からの影響力の信念」, 「子どものエージェンシー」の5つの内的要因以外に, タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会 (2022) が挙げた「将来の見通し要因」と, 松岡・深澤 (2022) による「言語能力評価要因」が挙げられる。「将来の見通し要因」とは, 家族が国を移動することによって変わる将来の生活設計や, 影響される教育の連続性を考慮した要因のことである。また「言語能力評価要因」とは, 親が子どもの言語認識や言語能力, 言語使用状況をどう認識し, どう評価しているかに関わる要因のことである。

さらに, Curdt-Christiansen & Huang (2020) で提示された外的要因以外に, タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会 (2022) が指摘した「社会生活的要因」が挙げられる。これは, インフラや安全性あるいは居住地や学費などの生活条件によって学校を選択し, その選択が言語選択につながるような要因のことである。

他に言語使用に影響を与える可能性のある個人要因として, 「宗教」, 「収入」, 「社会階級」の3つが挙げられる (Pauwels, 2016)。これらの要因は継承語維持や FLP に影響を与える重要な要因と思われる。1つ目の「宗教」に関して, Yazan & Ali (2018) は, アメリカに移住しているリビア人が信仰しているイスラム教は, アラビア語維持に大事な役割を果たしているという結果を報告している。Curdt-Christiansen & Huang (2020) (figure 1, p8) では, 外的要因の「社会文化的要因」の例として「宗教」が挙げられているが, 「宗教」と「文化」は異なるものであるため, 本稿では, それらを切り離して考えていく。これは, 1つの文化を共有する人が必ずしも同じ宗教を信じているわけではないからである。また, 宗教は個人に関わるものであるため, 本稿では, それを外的要因ではなく, 内的要因とする。「社会階級」については, Serrano-Hidalgo (2018) は, ブランドン<sup>3)</sup> 在住の家庭を調査し, 両親の高等教育の背景と優れた社会経済的地位は, ブランドンのヒスパニック系の子どもたちの継承語維持にプラスの影響を与える要因であるという結果を報告している。しかし, Schwartz (2010) による「親の学歴」(Parental education) に関する調査結果とは一致していない。つまり, プラスに働くこともあれば, マイナスに働くこともあるということである。

さらに, Schwartz (2010) は, FLP に影響を与えるもう1つの重要な要因として「親の文化変容」(Acculturation of the parents) を挙げている。これは, ホスト国の文化に対する親の文化変容のことであり, 新しい文化に適応するプロセスである。受入国および出身国の文化的アイデンティティーは, 移民の間で FLP を形成する上で重要な要因であると指摘している。この要因は個人に関わる要因であるため, 本稿において内的要因とする。

Curdt-Christiansen & Huang (2020) は, FLP の決定は, 言語信念, 世代間のスピーチリソースの性質, 両親の学歴, 彼ら自身の言語学習経験, 彼らの移住歴, および家族の経済的リ

ソースに影響されると述べている。

本稿でレビューした FLP に関わる内的要因は、感情的な要因 / 家族の結束と感情的な関係、アイデンティティー要因、文化的要因、親からの影響力の信念、子どものエージェンシー、家族構成、将来の見通し要因、言語能力評価要因、宗教、収入、社会階級、親の学歴、親の文化変容の 13 の要因である。それに対し、外的要因は、社会経済的要因、社会政治的要因、社会文化的要因、社会言語的要因、社会生活的要因の 5 つの要因である。ただし、FLP に影響を与える要因は FLP のどの領域（言語地位計画、言語形態計画、言語習得計画）にどのように影響するかが未だ不明である。

本研究では、特に言語地位計画に着目した上で、それに関わる現象としての言語シフトに着目する。また、言語シフトが発生する際、言語シフトとそれに関わる FLP にどのような要因が影響を与えるのか見ていく。

### 3. 言語シフト

Pauwels (2016) によれば、言語シフト (Language Shift) とは、すべての使用場面において、ある言語が徐々に別の言語（多数派言語）に置き換えられるプロセスでありその結果である。ただし、言語シフトがどのように発生するかに関する研究は見当たらない。そのため、エネザン (2022) は、継承語であるアラビア語から第 2 言語である日本語へのシフトを調べる目的で、在日シリア人の母親 3 名 (R さん, L さん, A さん) を対象とし、半構造化インタビューを行った。半構造化インタビューのデータは事例—コード・マトリックスという質的データ分析法により、分析を行なった。その結果<sup>4)</sup>、言語シフトには、1. 相手探しの試み<sup>5)</sup> (R さん)、2. コードスイッチング<sup>6)</sup> (L さん)、3. きょうだい間での全体的な使用 (A さん) という 3 つのパターンがあることが明らかになり、それぞれが言語シフトの進行段階を表していることが分かった。つまり、言語シフトは第 2 言語で話せる「相手探しの試み」という段階で始まり、それが止まらなければ第 2 言語への「コードスイッチング」になり、「コードスイッチング」が止まらなければ今度は、第 2 言語の「きょうだい間での全体的な使用」になると言える。また、言語シフトのどの段階でも母親が厳しい行動をとれば止めることが可能であることが明らかとなった。

一方、子どもの言語シフトに直面した母親の対応は、言語シフトの許可の可否の観点から見ると、次の 3 つのパターンがあることが明確となった。1. 言語シフトを許さず、すぐ止めた (R さん)、2. 言語シフトは許せなかったが、子どもが知らないアラビア語に対応する日本語の語彙や文法の使用を一時的に許した (L さん)、3. 言語シフトを許した後、止めた (A さん)。

### Ⅲ. 研究目的

先行研究を踏まえたうえで、エネザン（2022）で使ったインタビューデータを異なる視点から分析し直す。エネザン（2022）は、前章で述べた通り、子どもの言語シフトのパターンが3つあり、それぞれの母親の対応にもパターンが3つあることを明らかにしたものであり、本論文はこうしたパターンがどのような要因によって成立するのかを明らかにするものである。したがって、エネザン（2022）が構造を明らかにしたのに対して、本論文は過程を明らかにしようとしたものである視点で異なる。

インタビューはアラビア語で行われ、それを第一著者が日本語に訳したものをを用いる。本研究では、上述の通り、母親たちがそれぞれ異なった対応（異なったFLP）をとった過程を明らかにした上で、その要因について考察する。既にとったインタビューデータを異なる目的と方法で分析することにより、言語シフトとそれに対するFLPの共通した過程が明らかとなり、家庭内での継承語維持の可能性について検討できる。それに加え、言語シフトという現象について新しい理解が深まり、当事者支援に役立つことが可能になる。「1, 言語政策と家族言語政策（FLP）」で述べた要素（言語管理, 言語実践）を参考にし、以下のリサーチクエスション1（RQ1）を設定する。

RQ1：それぞれの母親（Rさん, Lさん, Aさん）の子どもの言語シフトとそれに対する対応（FLPの言語管理と言語実践）に影響を与えた要因はどのようなものか

「1, 言語政策と家族言語政策（FLP）」で述べた言語信念に触れない理由としては、本研究で対象とした3名はイスラム教徒としてのアイデンティティを持ち、宗教的な理由で継承語たるアラビア語を維持したいという強い信念を持っているからである。そのため、次のリサーチクエスションでは、継承語維持への信念、いわゆる継承語を維持することの大切さについてではなく、継承語維持に対する意識を検討する。本研究の継承語維持に対する意識とは、家庭内で継承語使用を維持しなければ、子どもの継承語能力が弱まり、親子間での継承語を用いたコミュニケーションが困難または不可能になるという意識のことである。エネザン（2022）では、母親の対応に3つのパターンがあるにも関わらず、結果的には3名とも言語シフトを止めたことから、3名とも継承語維持に対する意識を持っているということが分かった。本稿では、継承語維持に対する意識はどう形成され、どう変容されたかを検討するため、以下のリサーチクエスション2（RQ2）を設定する。

RQ2：継承語維持に対する意識はどのように形成され、どのように変容したのか。

### Ⅳ. 調査協力者

エネザン（2022）で指摘した通り、協力者は関東圏に在住する1世の母親3名（Rさ



表1 調査協力者の基本情報

	Rさん	Lさん	Aさん
生年（年齢）	1980（41歳）	1983（38歳）	1980（41歳）
来日時期（西暦年）	2013	2010	2010
子どもの人数と生年（年齢）	4人 長男 2009（12歳） 長女 2015（6歳） 次女 2016（5歳） 三女 2018（3歳）	3人 長男 2010（11歳） 次男 2013（8歳） 三男 2015（6歳）	4人 長女 2006（15歳） 長男 2009（12歳） 次女 2013（8歳） 三女 2019（2歳）
保育園・幼稚園の入園の有無（入園年齢）	・保育園 長男：1歳7ヶ月 マレーシア 長女：3歳 日本 次女：2歳半 日本 三女：6ヶ月 日本 ・幼稚園 長男：3歳 マレーシア 3歳 日本	・保育園 長男：4歳半 日本 次男：1歳8ヶ月 日本 三男：3歳半 日本	・幼稚園 長女：3歳 日本 長男：3歳 日本 次女：3歳 日本
来日時の母親の日本語能力	できない	できない	できない

エネザン（2022）表1を引用し、一部改変。

ん、Lさん、Aさん）である。次の条件で協力者を選定した。①小学校に入学済みの子どもがいる。それは、先行研究で述べられているように言語シフトが起こるきっかけは「学校」であるからである。②2人以上の子どもがいる。それは、第2言語である日本語ができない母親であれば、子どもの相手になれないが、言語シフトに直面している子ども同士だと言語シフトの相手になりやすいと考えられるためである。また、エネザン（2022）で明示していなかったが、もう1つの条件はインタビュー現在子どもが家庭内でアラビア語のみで喋ることである。対象とした家庭は母親も父親も継承語を維持したいという信念を持っており、アラビア語のみで子どもと喋る家庭である。Romaine（1990）の幼少期のバイリンガル習得の種類によれば、種類3「コミュニティの支援のない少数派言語」（non-dominant home language without community support）という家庭に相当する。なお、母親による言語政策に焦点を当てる理由としては、まず、筆者の当事者意識による部分が多い。というのは、筆者は海外である日本でシリア人の相手と結婚しており、今後子どもを産み育てる予定があるためである。それに加え、周りのシリア人家庭では、父親より、母親の方が子どもとの接触の時間がかなり長いためである。協力者の基本情報を表1で示す。

## V. 分析方法と分析手順

分析方法として、過程が分析可能な複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach; TEA) を採用する。TEA は、構造 (ストラクチャー) ではなく、過程 (プロセス) を理解しようとするアプローチであり、「複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Modeling; TEM)」, 「歴史的構造化 (Historically Structured. Inviting; HSI)」, 「発生の3層モデル (Three Layers Model of Genesis; TLMG)」を統合したものである (安田・滑田・福田・サトウ, 2015)。HSI は対象者選定のための枠組みであり、等至点を経験した人を調査にお招きすることである (安田・滑田・福田・サトウ, 2015)。

TEM は、人生径路をつくっていく (安田・サトウ, 2017), その多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデル (荒川・安田・サトウ, 2012) である。本研究の RQ1 では、家庭内でどのような言語管理 (選択/決断) がなされ、どのような言語実践 (行動) を行ってきたかを描くことを目指すため、TEM が適していると考えた。特に言語管理と言語実践に影響を与える要因を分析するため、TEM の社会的ガイド (Social Guidance: SG), 社会的方向づけ (Social Direction: SD) を中心に分析する。

また、分岐点において変容や維持が生じる際の自己に関する仮説的メカニズム (安田・滑田・福田・サトウ, 2015) を表す発生の3層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) は、継承語維持に対する意識の形成/変容に適しているため、RQ2 に使用する。

分析手順は以下の通りである。まず、①半構造化インタビューを文字化した。次に、②オープンコーディングを行なった。そして、RQ1 の分析手順として③対象者それぞれの TEM 図を描いた上で、統合した TEM 図を描いた。なお、本稿では、紙面の関係上各自の TEM 図は省略し、統合した TEM 図のみを提示する。TEM の等至点 (Equifinality Point: EFP), 両極化した等至点 (Polarized EFP: P-EFP), 必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP), 分岐点 (Bifurcation Point: BFP), 社会的ガイド (Social Guidance: SG), 社会的方向づけ (Social Direction: SD) を設定した。

等至点は、研究者が等しく至るとして焦点を当てた点 (サトウ, 2006) であるため、本研究の等至点は、「家庭内で継承語使用を維持する」にした。両極化した等至点は、価値的に背反であるような2つ以上の等至点を指し示す概念であり、対極にあるポイント (安田, 2015) であるため、本研究の両極化した等至点は「家庭内で継承語使用を維持しない」にした。また、必須通過点は、複数の径路が必ず通る点 (サトウ, 2006) であるため、言語シフトを「初期段階 (相手探しの試み), 中期段階 (コードスイッチング), 後期段階 (きょうだい間での全体的な使用), 本研究で追加した末期段階 (相手を増やす試み)<sup>7)</sup>」に分類したうえで、必須通過点として言語シフトの初期段階 (相手探しの試み) を設定した。言

語シフトの初期段階は、先行研究によれば、「保育園」・「幼稚園」への入園、「学校」への入学がきっかけで発生し、それを止めるか止めないかにより、「中期段階、後期段階、末期段階」に進行するかないかが決まる。分岐点は、Aという方向に行くかBという方向に行くか逡巡のある状態（荒川ら, 2012）であり、実現する行動・選択として焦点化される点（安田・サトウ, 2017）であるため、本研究の分岐点としては、親のとった政策（FLPの言語管理と言語実践）にした。言語管理とは、親が言語シフトを許すか許さないかの選択/決断のことであり、言語実践とは、言語管理に対するストラテジー（行動）のことである。社会的ガイド（SG）は、等至点に近づけるように働く力（荒川ら, 2012）であるため、本研究では、等至点に至るまでプラスに働いた要因（継承語維持を促進した要因）にした。社会的方向づけ（SD）は、等至点から遠ざけるように働く力（荒川ら, 2012）であるため本研究では、等至点に至るまでマイナスに働いた要因（言語シフトを促進した要因）にした。

最後に、④時期区分を設定した。分岐点である「言語シフトの許可の可否の決断をする、言語シフトを止める、あるいは止めないストラテジーをとる」をもとに、第1期（言語シフトの初期段階）、第2期（言語シフトの進行の有無）、第3期（言語シフトを止める）を区分して記した。

一方、RQ2の分析手順は以下の通りである。まず、①TEM図で明確となった分岐点を抽出した。次に、②促進記号となる経験を抽出した。最後に、行動変容に繋がった継承語維持に対する意識の形成/変容を表す発言を抽出し分析を行った。

## VI. 分析結果

### 1. RQ1（TEM図を用いて）

RQ1は「それぞれの母親（Rさん、Lさん、Aさん）の子どもの言語シフトとそれに対する対応（FLPの言語管理と言語実践）に影響を与えた要因はどのようなものか」である。

#### 1) Rさんの事例

##### 第1期「言語シフトの初期段階」（OPP～BFP1a）

ここでは、(1)「言語シフトの初期段階の発生のために働いた要因」を見る。Rさんの長女（2番目の子）は保育園に入園し（SD）、家庭内において第2言語で話せる相手（母親、きょうだい）の存在があった（SD）ため、言語シフトの初期段階（相手探しの試み）が発生した。「2番目の子である長女が保育園に入園した際に、母親、兄、妹と日本語で喋ろうとした。つまり、日本語で喋る相手がいるかどうかということを確認するための試みである」（エネザン, 2022）。

## 第2期「言語シフトの進行の有無」（BFP1a～BFP2a）

ここでは、(2)「言語シフトの初期段階を許さない決断をする、言語シフトの初期段階を止めるストラテジーをとるために働いた要因」を見る。Rさんは帰国予定がなかった（SG）ため、言語シフトの初期段階を許さない決断をし、言語シフトの初期段階を止める「注意」というストラテジーをとった。なお、Rさんは帰国することが不可能であるため、日本にしながら家庭内でアラビア語を維持するしかない、という意味において「帰国予定がなかった」をSGとした。長女は4か月間にわたって、特に遊びたい時に日本語で喋る試みを続けた（エネザン，2022）が、初期段階以降の他の段階には進行しなかった。Rさんのとった「母親は子どもに第2言語ができるという姿勢を見せない」<sup>8)</sup>（日本語で話したらママは分からないよ）というストラテジーのおかげだったと言える。「1番上の子は2番目の子よりも6つ年上で、すでに家庭内ではアラビア語のみで喋るため、2番目の子から日本語で話しかけられた際に、『アラビア語で喋りなさい』と返していたという。また、2番目の子より1つ年下の3番目の子も、2番目の子（姉）から日本語で話しかけられた際には『ママは日本語で喋っちゃダメだって言ってるじゃん』というように返していたという。」（エネザン，2022）。なお、3番目の子は保育園に入園したばかりであり、日本語はまだ話せない状況だった。

## 第3期「言語シフトを止める」（BFP2a～EFP）

ここでは、(3)「言語シフトを止める別のストラテジーをとる決断をする、言語シフトを止める別のストラテジーをとるために働いた要因」を見る。Rさんの子どもは、初期段階以降の段階には進行しなかったにもかかわらず、初期段階が継続するという状況が見られた。長女が4か月間にわたって、特に遊びたい時に日本語で喋る試みを続けたことを受け、Rさんは、「親子関係を切る脅し」<sup>9)</sup>というストラテジーをとった。

## 2) Lさんの事例

### 第1期「言語シフトの初期段階」（OPP～BFP1a）

ここでは、(1)「言語シフトの初期段階の発生のために働いた要因」を見る。Lさんの1番目の子である長男と2番目の子である次男が一緒に保育園に入園し（SD）、家庭内において第2言語で話せる相手（母親、きょうだい）の存在があった（SD）ため、言語シフトの初期段階（相手探しの試み）が発生した。

### 第2期「言語シフトの進行の有無」（BFP1a～BFP2a）

ここでは、(2)「言語シフトの初期段階を許さない決断をする、言語シフトの初期段階を止めるストラテジーをとるために働いた要因」を見る。Lさんは、シリアに帰国予定がなかった（SG）ため、言語シフトの初期段階を許さない決断をし、言語シフトの初期

段階を止める戦略をとった。その戦略は、エネザン（2022）で述べた「注意」という戦略と、「子どもが知らないアラビア語に対応する日本語の語彙や文法の使用を一時的に許した」<sup>10)</sup>という戦略である。本研究では、この戦略を「母親は子どもに第2言語ができるという姿勢を見せる」という戦略と名づける。母親が日本語の使用を許可したのは、アラビア語でそれに対応するものを教えたいから（アラビア語の知らない語彙はまず日本語を使い、それに対応するアラビア語を教えることができるから）であるが、それは同時に子どもに第2言語ができるという姿勢を見せたということにもなる。それを経て初期段階は次の段階（中期段階＝コードスイッチング）に進行した。3番目の子と母親にもコードスイッチングがあり、会話の20%で日本語が用いられていた（エネザン, 2022）。それは、Lさんのとった「母親は子どもに第2言語ができるという姿勢を見せる」（アラビア語を教えるために日本語を許す）という戦略によるものである。

### 第3期「言語シフトを止める」（BFP2a～EFP）

ここでは、(3)「言語シフトを止める別の戦略をとる決断をする、言語シフトを止める別の戦略をとるために働いた要因」を見る。初期段階は中期段階に進行し、その状況が継続した。長男と次男（1番目と2番目の子）は約3年にわたって、特に寝る前に日本語で喋ることが多いという状況が継続した（エネザン, 2022）ため、Lさんは「叩く」、「継承語の大切さを意識させる」という戦略をとったが、それが有効でない場合に「アイデンティティーへの脅し」<sup>11)</sup>「自分の価値観と反する行動をさせる脅し」<sup>12)</sup>という戦略をとった。

## 3) Aさんの事例

### 第1期「言語シフトの初期段階」（OPP～BFP1b）

ここでは、(1)「言語シフトの初期段階の発生のために働いた要因」を見る。Aさんの長女（1番目の子）は幼稚園に入園し（SD）、家庭内において第2言語で話せる相手（母親、きょうだい）の存在があった（SD）ため、言語シフトの初期段階（相手探しの試み）が発生した。

### 第2期「言語シフトの進行の有無」（BFP1b～BFP2b）

ここでは、(2)「言語シフトの初期段階を許す決断をする、言語シフトの初期段階を許す戦略をとるために働いた要因」と、(3)言語シフトの末期段階を許さない決断をする、言語シフトの末期段階を止める戦略をとるために働いた要因」を見る。

まず、(2)「言語シフトの初期段階を許す決断をする、言語シフトの初期段階を許す戦略をとるために働いた要因」に関しては、Aさんは、帰国する予定があった（SD）。

学校による圧力（SD）と⑥日本人の保護者による圧力（SD）という2つの圧力をかけられ、すでに勉強した第2言語である日本語の限界を感じた（SD）ため、言語シフトの初期段階を許した。Aさんは「注意」というストラテジーをとったが、言葉だけで態度はそこまで厳しくしなかったという。学校と日本人の保護者からの圧力は『娘さんの日本語は良くない』『子供っぽい』『失礼』『話し方が子どもっぽくて丁寧さがないよ』といったものである。Aさんは言語シフトを許す2つのストラテジーをとった。1つ目は、「子ども間における日本語での会話を無視する」というストラテジーである。たまに「アラビア語で喋りなさい」と注意はするが、ほとんどの場合、子どもが日本語で話しているのを聞いた際に無視していた。2つ目は、「子どもに日本語でのテレビを見せる」というストラテジーである。初期段階はそれ以降の段階（中期段階＝コードスイッチング、後期段階＝きょうだい間での全体的な使用、末期段階＝相手を増やす試み）に進行した。それは2年程度継続したという。

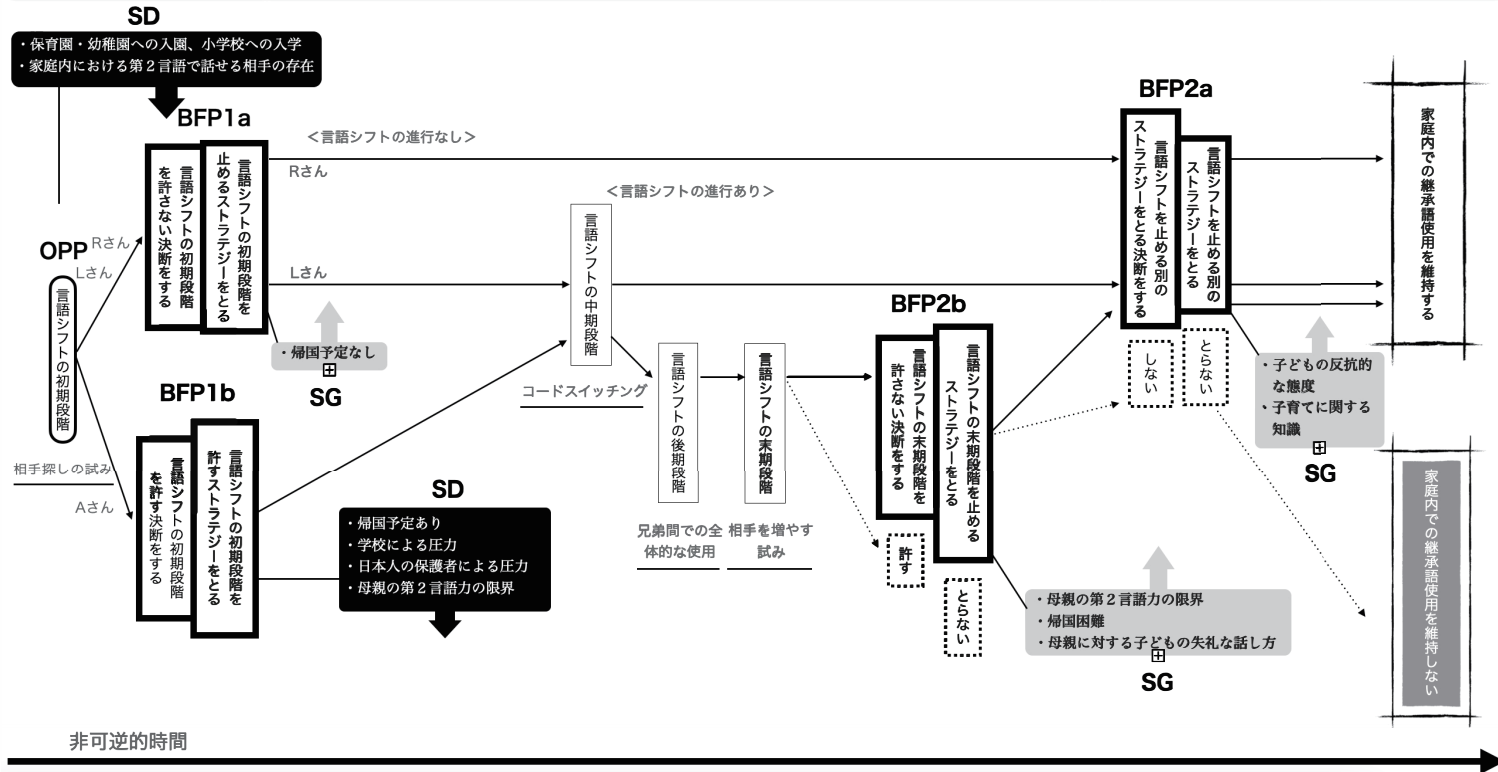
(3)「言語シフトの末期段階を許さない決断をする、言語シフトの末期段階を止めるストラテジーをとるために働いた要因」に関しては親子間での日本語シフトの可否によるものがあつた。Aさんの長女と長男は日本語でずっと話していたために、長女はアラビア語より日本語の方が話せるようになり、Aさんに「アラビア語が分からないから日本語で喋って」と言うようになった。Aさんはきょうだい間の日本語へのシフトは許していたが、親子間の日本語へのシフトは許さなかった。それは、第2言語力の限界を感じていた（SG）という1つの要因によるものである。また、帰国の困難（SG）という要因によるものでもある。2011年に始まったシリアの紛争<sup>13)</sup>がなかなか収まらないため、帰国が困難となり、その影響も含めAさんが当初予定していたものとは全く別の状況となってしまった。

「私にとってはシリアに帰ることはできなくなったっていうのはもちろんあつたけど、マナーまで変わるってなるともう待つのは全然ダメになって」とAさんは言う。長女は態度が変わり、母親に対して子どもが失礼な話し方をする（SG）という要因が大きく影響した。長女はAさんに対してアラビア語における失礼な言い方で話すようになり、具体的には「笑いながら喋ったりする」「相手を配慮しないような言い方だった」「凶々しい言い方だった」「彼女の日本人の友達がお母さんとどう喋るのか見たけど、そんな喋り方だった」という。そこで、言語シフトを止める最終段階のストラテジーとして、Aさんは、知り合いとアラビア語オンライン学校を始めた。つまり、「継承語教育を正式的に行う」というストラテジーをとった。

### 第3期「言語シフトを止める」（BFP2b～BFP2a）

ここでは、(4)「言語シフトを止める別のストラテジーをとる決断をする、言語シフト

第1期（言語シフトの初期段階）	第2期（言語シフトの進行の有無）	第3期（言語シフトを止める）
-----------------	------------------	----------------



- EFP  
等至点
- P-EFP  
両極化した等至点
- OPP  
必須通過点
- BFP  
分岐点
- SD  
社会的方向づけ
- SG  
社会的助勢
- 選択した行為・経験
- 選択されなかったが  
あり得る行為・経験
- 語りから得られた経路
- 語りから得られなかった経路

図3 言語シフトとそれに対してとられたFLPのTEM図

を止める別のストラテジーをとるために働いた要因」を見る。子どもの反抗的な態度があり（SG）、Aさんの言うことを長女が聞いてくれない他、頼み事に対して反抗的な態度をとっていた。それは、彼女が学校で受けていたいじめの影響と、Aさんの子育てのしかたの影響（後でAさんはそれに気づく）によるものだったという。その時は、Aさんは周りの子育てに流され、子育てとは子どもに怒ったり、叫んだり、叱ったり、批判したり、比較したりするようなものだと思っていた。長女の態度が変化し、親子のギャップが大きくなってから、Aさんは親子関係に何か問題があると気づくが、その当時は何が原因なのかが分からず悩んでいた。そこで、Aさんはオンラインで教育学の勉強を始め、そのおかげで、自分の子育てのしかたが間違っており、親子関係がだめになった原因であったと認識した。以降、長女との親子関係を改善しつつ、長女と長男との言語シフトはもう一切許さないと決心した。つまり、子育てに関する知識（SG）がAさんのFLPを変えるきっかけとなった要因だったといえる。その際Aさんは「条件的事前同意」<sup>14)</sup>というストラテジーと「継承語の大切さを意識させる」というストラテジーをとり、言語シフトを止めさせた。

統合したTEM図を図3の通り示す。

## 2. RQ2（TLMGを用いて）

RQ2は「継承語維持に対する意識はどのように形成され、どのように変容したのか。」である。

### 1) Rさんの事例

Rさんは、アラビア語教育を専門（PhD）としており、子どもにきっちりアラビア語を習得して欲しいと思った。彼女は来日する前にマレーシアにしばらく住んでいた。マレーシアと日本で他の母親の経験を聞く機会があり、Rさんは「母親は子どもが第2言語で話しているのは単語レベルだからいいんじゃないかと思っている」がその単語がどんどん増え、親がコントロールできなくなるといったという。また、Rさんが2013年に来日したときシリアの紛争はすでに始まっており、帰国が困難となっていた。さらに、2015年（来日して2年後）に長女を出産したため、その間に継承語維持に対する意識が形成される余裕があったと考えられる。そういった経緯でBFP1aに至ったと思われる。また、長女を保育園に入園させ、言語シフトの初期段階が発生し、それが止まらないという状況が続いたという自分の経験を経て「子どもに日本語で話させたら、アラビア語ができなくなる」「日本語で喋るのは他の子どもに移るのは嫌だ」と思ったと述べている。そこで継承語維持に対する意識が高まり、BFP2aに至ったと考えられる。RさんのTLMGを以下の図4で示す。



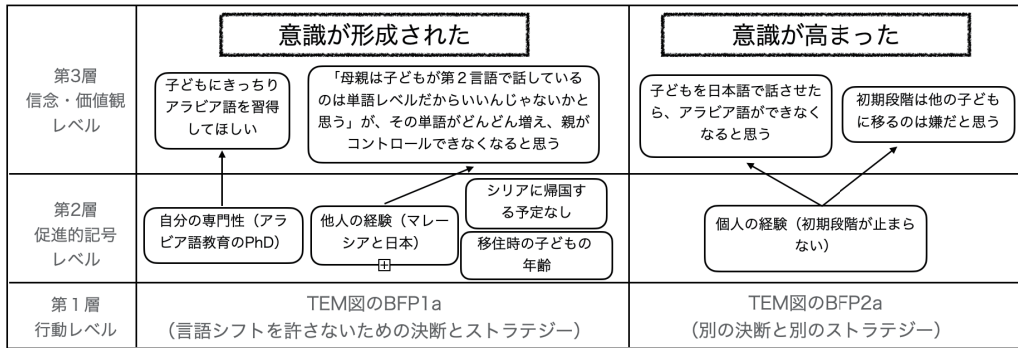


図4 RさんのTLMG(継承語維持に対する意識形成・変容)

## 2) Lさんの事例

Lさんには、バングラディッシュ出身の隣人がおり、子どもが隣人の子どもと同じく日本語でしかコミュニケーションをとれなくなってしまったら、あまり日本語が話せない自分はどうかコミュニケーションをとればいいのか、どう子育てをしたらいいか、子どもがクルアーン<sup>15)</sup>を読めるようになるにはどうしたらいいか、子どもが自分の宗教についてどう調べられるか、とても想像できないと思ったという。このような思いに至った、つまり、継承語維持に対する意識が形成されたのは長男が保育園に入園し、言語シフトの初期段階が始まっていた頃だと思われる。Lさんは2010年に来日し、長男を産んだのはちょうどシリアの紛争が始まった2011年だったため、シリアへの帰国が困難になった。そういった経緯で、BFP1aに至ったと考えられる。

また、長男を保育園に入園させ、言語シフトの初期段階が発生し、それが止まらず中期段階に至るといいう状況が続いたという経験を通して「子どもが知らないアラビア語を教えたはずなので、日本語ではなく、アラビア語で喋って欲しい」と思ったという。そこで継承語維持に対する意識が高まり、BFP2aに至ったと考えられる。LさんのTLMGは図5で示す。

## 3) Aさんの事例

Aさんは2010年に来日し、3～4年で夫が大学院を修了したらシリアに帰国する予定であったため、子どものアラビア語はなんとかあると思っていた。なお、Aさんが来日したのは1月で、長女を幼稚園に入園させたのは4月であるため、来日から入園まで3ヶ月あり、長女の年齢は3歳半程度だったと言える。Aさんは周りに知り合いがいなかったため、他の親の経験を聞く機会がなかった。つまり、継承語維持に対する意識は形成されていなかった。

長女は小学校に入学し、Aさんは長女の日本語力に関する圧力を学校からかけられた。

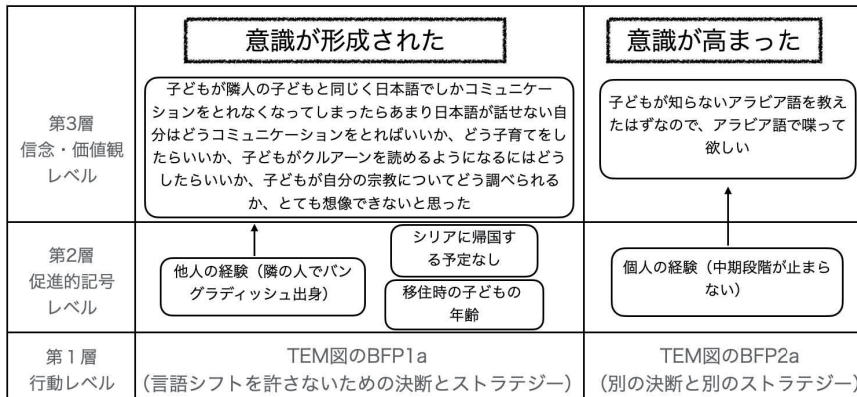


図5 LさんのTLMG（継承語維持に対する意識形成・変容）

当時のAさんは自分が日本語を勉強すればいいと思っており、実際に勉強を経て長女の1年生の教科書が読めるようになった。しかし、今度は日本人の保護者から圧力をかけられた。その際Aさんは「私は確かに日本語を勉強しているけど、彼女を教えるために十分じゃない」と返したが、そこで第2言語力の限界を感じた。子どもの第2言語力の不足が親のせいとされるのが嫌になり、子どもが日本語を話したら、よくなるのではないかと思い、BFP1bに至ったと考えられる。長女が母親に日本語で話すことを求めた際、Aさんは、自分の第2言語力の限界を感じ、子どもとコミュニケーションができなくなるのではないかと思った他、自分は日本語ができないから、子どもにアラビア語を守ってもらうしかないと思った。なお、ちょうどその時はシリアへの帰国が困難になっており、Aさんが当初考えていた予定とは大きく変わってしまったと思った。

しばらくすると、長女の話し方がAさんに対して失礼になり、それに対してAさんは「子どもがアラビア語で喋ることに戻ったら、語彙力が上がり、共通言語でコミュニケーションが増えるから、自分の気持ちや価値観を伝えられる」「アラビア語を守らせる責任は母が持っている」と思ったという。つまり、個人の経験により、継承語維持に対する意識が形成され、BFP2bに至ったと考えられる。

今度はAさんの長女の態度が反抗的となり、Aさんは子どもとのギャップが大きくなったと感じた。そこで、Aさんは個人の経験を経て継承語維持に対する意識が高まり、教育学を勉強し始めた。そのおかげで自分の子育ての仕方が原因だったと認識し、子どもとの関係をよくしつつ、きょうだい間の言語シフトは一切許さず、「厳しくしないと」と決心した。そのため、BFP1aに至ったと考えられる。AさんのTLMGは以下の図6-a、図6-bで示す。

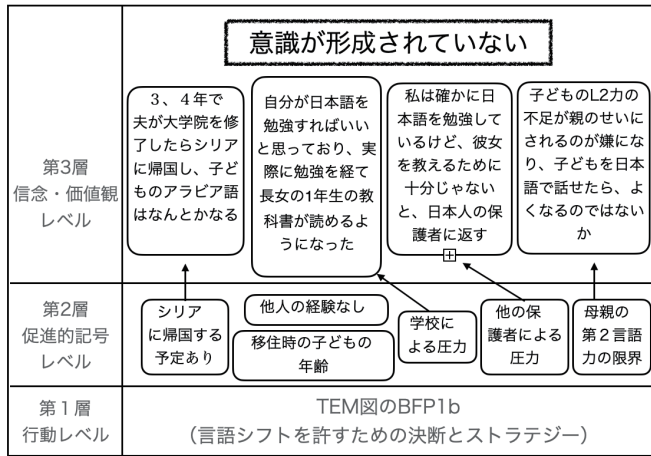


図 6-a A さんの TLMG (継承語維持に対する意識形成・変容, BFP1b)

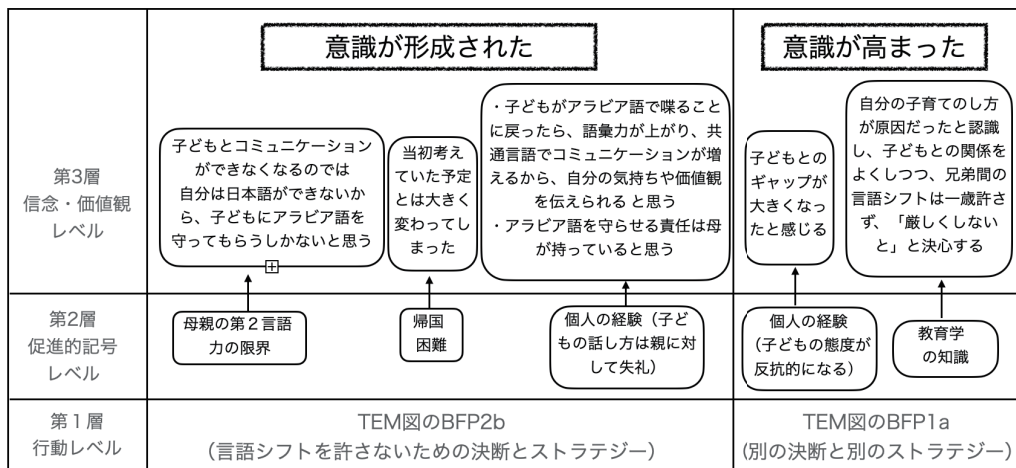


図 6-b A さんの TLMG (継承語維持に対する意識形成・変容, BFP2b・BFP1a)

## VII. 総合的考察

### 1. 言語シフトとFLP(言語管理と言語実践)に影響を与えた要因(TEMを用いて)

本研究のSDは「保育園・幼稚園への入園, 小学校への入学」, 「家庭内における第2言語で話せる相手の存在」, 「帰国予定あり」, 「学校による圧力」, 「日本人の保護者による圧力」, 「母親の第2言語力の限界」にまとめられる。「保育園・幼稚園への入園, 小学校への入学」と「家庭内における第2言語で話せる相手の存在」は言語シフトに影響を与える要因であり、「保育園・幼稚園への入園, 小学校への入学」は、外的要因とし、エネザン(2022)で述べた通り、「第2言語である日本語での交流が始まれば、言語シフトが発生し得るとい

うことが言える」ということから、この要因を「第2言語での交流機会」と名づける。「家庭内における第2言語で話せる相手の存在」は、先行研究の「家族構成」に当てはめることが可能であるが、本研究では、継承語伝達だけではなく、第2言語伝達の役割について見てきた。それを内的要因とする。

一方、「帰国予定あり」、「学校による圧力」、「日本人の保護者による圧力」、「母親の第2言語力の限界」はFLPに影響を与える要因である。「帰国予定あり」、「学校による圧力」、「日本人の保護者による圧力」は外的要因であり、「母親の第2言語力の限界」は内的要因である。

SGは「帰国予定なし」、「母親の第2言語力の限界」、「帰国困難」、「母親に対する子どもの失礼な話し方」、「子どもの反抗的な態度」、「子育てに関する知識」にまとめられる。「帰国予定なし」と「帰国困難」は外的要因であり、それ以外の要因は内的要因である。

また、「母親の第2言語力の限界」は能力に関する要因であり、本研究独自の要因である。この要因は、SGとして働くこともあるということが明確となった。

「日本人の保護者による圧力」は、先行研究の「社会文化的要因」に当てはめることができる。日本の文化では世代による話し方のバリエーションが多く、その使い分けができることが当たり前のようにになっている。

「母親に対する子どもの失礼な話し方」と「子どもの反抗的な態度」は本研究独自の要因であり、「子どもの態度変容」と名づける。「帰国予定あり」「帰国予定なし」「帰国困難」も本研究独自の要因であり、「帰国の有無」と名づける。

表2 言語シフトに影響を与えた要因

言語シフト	SD
内的要因	「家庭内における第2言語で話せる相手の存在」
外的要因	「第2言語での交流機会」

表3 言語管理 言語実践に影響を与えた要因

言語管理/語実践 (決断・ストラテジー)	SD	SG
内的要因	「母親の第2言語力の限界」	「母親の第2言語力の限界」 「母親に対する子どもの失礼な話し方」 「子どもの反抗的な態度」 「子育てに関する知識」
外的要因	「帰国予定あり」 「学校による圧力」 「日本人の保護者による圧力」	「帰国予定なし」 「帰国困難」

言語シフトに影響を与えた要因を表 2 で、言語管理 / 言語実践に影響を与えた要因を表 3 で示す。

## 2. 継承語維持に対する意識形成 / 変容 (TLMG を用いて)

本研究では、継承語維持に対する意識形成・意識向上要因を検討する。まず、継承語維持に対する意識形成要因は、「母親の専門性」(内的要因)、「他人の経験」(外的要因)、「個人の経験」(内的要因)、「移住時の子どもの年齢」(内的要因)、「子育てに関する知識」(内的要因)にまとめられる。「母親の専門性」は、先行研究で触れた「親の学歴」とは異なり、学歴が高いかどうかということではなく、その専門が言語学、バイリンガリズム、教育学、などに関するものであるということである。「子育てに関する知識」は、教育機関や独学などで得られた子育てに関する知識を指す。

一方、継承語維持に対する意識向上要因は「移住時の子どもの年齢」以外の上記の要因が全て含まれ、かつ「帰国の有無」(外的要因)という要因である。それは、「移住時の子どもの年齢」以外の要因は可変性のあるものであるため、継承語維持に対する意識を高める役割を果たすからである。

RさんとLさんは、継承語維持に対する意識は形成されていたが、なぜ言語シフトの初期段階を止めるストラテジーが異なったかという点、Lさんの継承語維持に対する意識は「他の親の経験を見て何かしたい」ということにとどまっていたが、Rさんの継承語維持に対する意識は「ノウハウが分かる」(どの対応をすれば、子どもに継承語で話させることができるか)というところまで至っていたからだと考えられる。つまり、継承語維持に対する意識は3つに分けられ、「意識が形成されていない」、「意識は形成されたが、ノウハウが分からない」、「意識が形成された、かつノウハウが分かる」となることが分かる。

Brown (2011) は、親の信念は確かに子どもの態度に影響を与えるが、継承語を効果的に維持する要素として十分ではないと述べている。Pillai, Soh, & Kajita (2014) も、継承語を維持したいという信念があってもそれが必ずしも家族のドメインでの言語の伝達に反映されるわけではないと指摘している。また、この結果を支持する研究に Liang (2018), Piller & Gerber (2018), Rannut (2011) がある。継承語維持に信念だけでは不十分だという先行研究の結果は、継承語維持に対する母親の意識がないからなのではないだろうか。継承語維持のための信念を管理・実践と結びつける役割を果たすのが継承語維持に対する意識なのである。つまり、継承語を維持したいという信念はあるが、継承語維持に対する意識が形成されていないという場合は、継承語は維持されないということが本研究で分かった。「継承語維持に対する意識」は、先行研究の「親からの影響力の信念要因」に近いが、要因ではなく、FLPの欠かせない1つの構成要素であることが明確となった。

表 4 継承語維持に対する意識に影響を与えた要因

継承語維持に対する意識	意識形成要因	意識向上要因
内的要因	「母親の専門性」 「個人の経験」 「移住時の子どもの年齢」 「子育てに関する知識」	「母親の専門性」 「個人の経験」 「子育てに関する知識」
外的要因	「他人の経験」	「他人の経験」 「帰国の有無」

「子育てに関する知識」は継承語維持に対する意識の高まりにつながった要因であるため、「意識形成要因」の1つの要因とする。

また、先行研究の「社会政治的要因」に当てはまる本研究の要因として「学校による圧力」が挙げられる。これは、現在の日本においては外国人が日本の学校に入学すると、日本語を熟達しないといけないことになっていることによる。

本研究の結果から出た要因を表4で示す。

### 3. 言語シフトとそれに対する FLP の過程

バイリンガルの子どもは「言語シフトの初期段階（相手探しの試み）」という必須通過点を「第2言語での交流機会」という要因がきっかけで通る。そこで母親の前に2つの選択肢が現れる。1つ目は、「言語シフトの初期段階を許さず、それを止める戦略をとる」。2つ目は、「言語シフトの初期段階を許し、それを止める戦略をとらない」である。その2つの決断に決定的に働くのは、「継承語維持に対する意識形成の有無」であることが分かった。「帰国の有無」は重要な要因ではあるが、「継承語維持に対する意識形成の有無」は、その影響の有無を決定する1番重要な FLP の構成要素であることが明らかとなった。「帰国予定なし、かつ意識が形成された」という場合は、1つ目の選択をとる。「帰国予定あり、かつ意識が形成されていない」という場合は、2つ目の選択をとる。本研究の対象にはなかったが、他の可能性として「帰国予定なし、かつ意識が形成されていない」と「帰国予定あり、かつ意識が形成された」という場合が挙げられる。「帰国予定なし、かつ意識が形成されていない」という場合は、母親には継承語維持に対する意識が形成されていないため、2つ目の選択をとると予想される。「帰国予定あり、かつ意識が形成された」という場合は、1つ目の選択をとると予想される。それは、母親が子どもを国の学校に行かせる際子どもが母語を話せなければ、ついていけないということを意識しているからであると思われる。

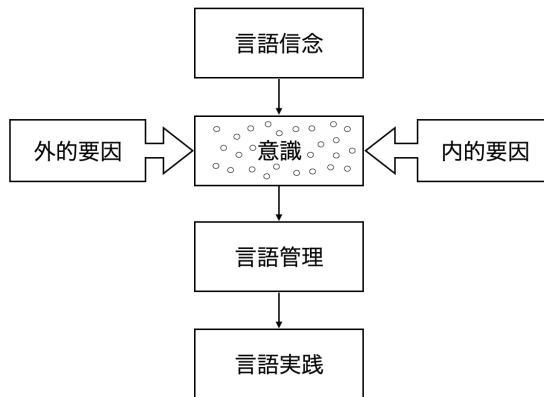


図 7 修正した FLP のダイナミック・モデル

また、「継承語維持に対する意識形成の有無」は「帰国の有無」の影響の有無のみを決定するだけではなく、他の要因の影響の有無も決定する。「学校による圧力」や「日本人の保護者による圧力」という外的要因は継承語維持に対する意識があれば、FLP に影響しないということである。

さらに、言語シフトの初期段階が他の段階に進行するかどうかを決定するのは、「継承語維持に対する意識」かつ言語シフトを許すか許さないかという選択の際にとられたストラテジーであることが明確となった。

エネザン (2022) では、言語シフトは「相手探しの試み」という段階で始まり、それで止まらなければ「コードスイッチング」になり、「コードスイッチング」が止まらなければ今度は、「きょうだい間での全体的な使用」になると言えるという結果を述べたが、本研究では、「きょうだい間での全体的な使用」の後の段階として、「相手を増やす試み」という段階があるということが明確となった。つまり、「きょうだい間での全体的な使用」が止まらなければ、「相手を増やす試み」になる可能性があるということである。

こうして用いた TEM 図を通して言語シフトとそれに対する FLP の過程モデルが明らかとなった。

また、Curd-Christianen & Huang (2020) の提案した FLP のダイナミック・モデルに基づいて、修正した FLP のダイナミック・モデルを図 7 の通り提案する。

Curd-Christianen & Huang (2020) が提案したダイナミック・モデルとは異なる点として、矢印の方向と「意識」を FLP の構成要素として追加したという点がある。本研究の矢印は言語信念から、意識、言語管理、言語実践へと向かっている。これは、母親がすでに継承語を維持したいと思っているという場合の図である。また、意識は言語信念と言語管理の間に位置し、それらを結びつける役割を果たすと共に、フィルターのような

役割を果たす。目（穴の大きさ＝意識の度合い）が粗い場合は、意識が形成されていない、あるいは低く、外的要因・内的要因が言語管理と言語実践に影響しやすいが、目が細かい場合は、意識が高く、外的要因・内的要因が言語管理と言語実践に影響しにくいと思われる。それと同時に、外的要因・内的要因（意識形成・向上要因）は、意識の目を粗くしたり、細かくしたりすると考えられる。

## VIII. まとめと今後の課題

本章では、家庭内での継承語使用の維持という観点から、在日シリア人の母親3名を対象に、子どもの言語シフトとそれに対する FLP に影響する要因の過去の経験について調査した。FLP に影響する本研究独自の要因として、「母親の第2言語力の限界」、「帰国の有無」、「子どもの態度変容」が見出された。また、「意識の有無」は他の要因の影響の有無を決定する1番大事な FLP の構成要素（Component）ということが分かった。さらに、「継承語維持に対する意識」は「意識が形成されていない」、「意識は形成されたが、ノウハウが分からない」、「意識が形成された、かつノウハウが分かる」に分けられており、それらにより、言語シフトの許可の可否に対する母親の取るストラテジーが異なる。従って、言語シフトは次の段階に進むか否かが決定されるということが明確となった。用いた TEM 図を通して言語シフトとそれに対する FLP の過程モデルが可視化された。最後に、Curdts-Christiansen & Huang (2020) に基づいて修正した FLP のダイナミック・モデルを提案した。

今後の課題として FLP の全体像を把握できるようにするために、言語地位計画のモデルだけではなく、言語形態計画、言語習得計画のモデルも明らかにする必要がある。また、今後、言語シフトの各段階の詳細を明らかにすることにより、バイリンガルの子どもの様子をより把握できるのではないかと考えられる。さらに、本研究では、母親へのインタビューという方法を用いて研究したが、言語シフトが本当に完全に止まったかどうか、つまり、子どもが日本語を一切使用しなくなったかどうかということを確認するために、別の方法での検討も必要だろう。

## 注

- 1) 後に続く「3, 言語シフト」の節に詳細が記載されている (p.5)。
- 2) 日本語訳は、タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会 (2022), そのままにする。
- 3) カナダのマニトバ州の都市である。
- 4) ここでは、「特徴」と「ストラテジー」に関する結果は本研究と深く関連しないため、省略する。



- 5) 日本語で話す相手がいるかどうかということを確認するための試みである。
- 6) コードスイッチングは、話しているときに2つ以上の言語、方言 (=言語の形式)、またはアクセント (=単語の発音方法) を切り替える行為のことをいう (出典: Cambridge dictionary)。
- 7) 末期段階は、子どもが第2言語で話す相手を増やす試みを指す。
- 8) Rさんは日本語の語彙の中に分かる語彙はあるが、分からないふりをしていたという。
- 9) 「日本語で喋るなら、もうあなたと話さないよ」(エネザン, 2022)。
- 10) エネザン (2022) では戦略یだと捉えていなかったが、本研究では戦略یだと捉える。
- 11) 母親は「日本語で話す人は『日本人』だから、彼と日本語で喋ろう、アラビア語で話す人は『アラブ人』だから、アラビア語で喋ろう」と言い、実際にそうする (エネザン, 2022)。
- 12) Lさんはイスラム教徒であるため、宗教により豚肉やお酒が禁じられている。しかし、Lさんは子どもの言語シフトを止めるために、「日本語で喋る人は日本人だから、日本人の家に連れて『豚』を食べさせてもらおう、『お酒』を飲ませてもらおう」と言って子どもを脅した。(エネザン, 2022)。
- 13) シリアの紛争は、2011年に始まり、現在 (2022 現時点) も続いている。UNによると、シリアは国連 WFP の最大の緊急事態の1つであり、その規模は驚異的である。過去11年間で、1,300万人以上のシリア人が母国を離れたり、国内で避難する選択を迫られた。世界の全難民の4分の1はシリア人で、彼らは安全を求めて130の国々に避難をしている。<<https://ja.wfp.org/stories/syria-home-and-abroad-families-struggle-cope-after-11-years-conflict>> (情報取得 2022/10/19)
- 14) 母親は「友だちんちに泊まりたい」と言う娘に「言っとくけど、そこに行っても彼女とアラビア語で話すなら泊まっていいけど、日本語で話すなら泊まっちゃだめだよ」と言った。娘は「はい」と言った (エネザン, 2022)。
- 15) イスラム教の聖なる本であるクルアーンはアラビア語で下され、クルアーン朗読や礼拝をするためにはアラビア語が欠かせない。

## 文献

- 荒川 歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例. 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- Cooper, Ralph L. (1989) *Language planning and social change*. New York, NY: Cambridge University Press.
- エネザン バラ (2022) 在日シリア人の母親の語りによる子どもの言語シフトに対する家族言語政策 (FLP) に関する研究——言語シフトのパターン・特徴とそれに対する母親の対応を中心に. 比較文化研究, 147, 213-221.
- Curd-Christiansen, X. L., & Huang, J. (2020) Factors influencing family language policy. In A. Shalley, & S. Eisenchlas (Eds.), *Handbook of Social and Affective Factors in Home Language Maintenance and Development*. De Gruyter Mouton, 174-193.
- Brown, C.L. (2011) Maintaining Heritage Language Perspectives of Korean Parents. *Multicultural*

- Education*. pp.31-37.
- 菊地浩平 (2010) (書評) Spolsky, Bernard. (2009) *Language Management*, Cambridge University Press, 308p. 言語政策, 6, 35-39.
- King, K.A., Fogle, L. and Logan-Terry, A. (2008) Family Language Policy. *Language and Linguistics Compass*, 2,1-16.
- Kloss, Heinz. (1969) Research possibilities on group bilingualism: a report. Quebec, Canada: *International Center for Research on Bilingualism*.
- Liang, F. (2018) Parental perceptions toward and practices of heritage language maintenance: Focusing on the United States and Canada. *International Journal of Language Studies*, 12 (2), 65-86.
- 松岡里奈, 深澤伸子 (2022) Family Language Policy 形成に影響を与える要因に関する一考察——タイに生きる泰日国際家族 A 家の父・母・子 3 者の語りから『MHB 研究』18, pp.48-64.
- Pauwels, A. (2016) *Language Maintenance and Shift (Key Topics in Sociolinguistics)*. Cambridge University Press.
- Pillai, S., Soh, W.Y. & Kajita, A.S. (2014) Family language policy and heritage language maintenance of Malacca Portuguese Creole. *Language & Communication*, 37, 75–85.
- Piller, I. & Gerber, L.(2018) Family language policy between the bilingual advantage and the monolingual mindset. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*. pp.1-14.
- Rannut, U. (2011) Maintenance of the Circassian Language in Jordan Self-identification, attitudes, policies and practices as indicators of linguistic vitality. *IRI Language Policy Publications*. pp.97.
- Romaine, S. (1990) *Bilingualis*. Blackwell Pub.
- サトウタツヤ (2006) 発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての複線径路等至性モデル. 立命館人間科学研究, 12, 65-75.
- Schwartz, Mila (2010) Family language policy: Core issues of an emerging field. *Applied Linguistics Review*.
- Serrano-Hidalgo, E. (2018) A Case Study of the Experiences and Perspectives of Hispanic Immigrant Parents on Heritage Language Maintenance and Bilingual Education in the Rural Community of Brandon, Manitoba. *BU Journal of Graduate Studies in Education*, 10 (2), 4-7.
- Spolsky, B. (2004) the nature of language policy and its domains. *Language Policy*. 39-56.
- Spolsky, B. (2007) Towards a Theory of Language Policy. *Working Papers in Educational Linguistics (WPEL)*, 22 (1), 1-14.
- Spolsky, B. (2009) *Language Management*. Cambridge University Press.
- Spolsky, B. (2012) Family language policy : the critical domain. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*. 1-9.
- タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会 (2022) 親と子の言語政策 第 18 回セミナー発表資料.
- 安田裕子 (2015) コミュニティ心理学における TEM/TEA 研究の可能性. コミュニティ心理学研究, 19 (1), 62-76.

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）（2015）ワードマップ TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ——. 新曜社.

安田裕子・サトウタツヤ編著（2017）TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する. 誠信書房.

Yazan, B & Ali, I.(2018) Family Language Policies in a Libyan Immigrant Family in the U.S.: Language and Religious Identity. *Heritage Language Journal*, 15 (3), 369-388.

(えねざん ばら・東京都立大学人文科学研究科博士後期課程・日本語教育学)

## Factors Affecting Children's Language Shift and Family Language Policy Related to Language Shift: A Narrative Analysis of Syrian Mothers Living in Japan Using the Trajectory Equifinality Approach (TEA)

Baraa Enezan

Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University

(Japanese Language Education )

Based on maintaining the heritage language at home, semi-structured interviews were conducted with Syrian mothers living in Japan about their past experience of factors that influenced their children's language shift and the family language policy (FLP) related to language shift. This study's unique factors are "Limits of Mother's Second Language Ability", "whether returning home is considered", and "changes in children's attitudes". Additionally, the "presence or absence of awareness towards Heritage language maintenance" was the most critical FLP component determining the presence or absence of the influence of the other factors. Furthermore, the "presence or absence of awareness towards Heritage language maintenance" was divided into "absence of awareness", "existence of awareness but lacking the knowledge of how to act", and "existence of awareness and knowledge of how to act". Accordingly, strategies implemented by the mothers differed as to whether to allow the language shift. Consequently, these strategies determined the presence or absence of language shift progress. The model for language shift and the FLP process were clarified using TEM (Trajectory equifinality modeling) diagram. Finally, we suggest a modified dynamic model of FLP based on Curdt-Christiansen & Huang (2020).

**Key words** : Heritage language maintenance, family language policy (FLP), language shift, code switching